九州のうたごえ近まる

廿一日より三日間福岡で

九州うたごえ大会は九月二十一日から三日間、福岡市スポーツセンターで、九州各地のうたごえサークル、民主団体、労働組合からの参加で盛大にうたの祭典を繰ひろげることとなつた。

産業別として炭労も参加することになつているが、各地評もこれに参加している。

【三池】では約七十名の参加が予定されており、三池労組としての統一行事として参加することになつている。このため、去る八月二十三日には代表会議を開いたが、三池労組自体として出演することはやめ、大地評（大牟田地評）と炭労の両日二回に出演することになつた。

地評としては八月九日に第一回会合を持ちいろいろ話合つた結果、出演曲目をフインランデイア、地底建設の歌に決定した。なおこのため合同練習として九月十三、十六日の両日労働会館で行うことになつた。

出場者は服装を統一しようと、この大会には黒か紺のズボンかスカートに白シヤツにすることになつた。また胸章としてグリーンの鳩を飾つて出場する。

炭労としての産業別うたごえには、指揮者として三池の原守男氏（宮崎）が決定した。炭労会員の合同練習は時間的に無理なため、三池のみ来る九日大牟田で行うこととなつた。

新女性への出発

山野・女子青年大会開く

残暑いまだひとしおきびしいとはいえ、炭住の庭園に咲きこぼれる真紅の鶏頭の花、木立のあちこちでかなでるつくつくぼうしのなきごえは、何時の間にか季節のカレンダーは秋を告げて来た。時九月一日、暦の上では農家にとつて最悪の厄日になつているにもかかわらず、絶好の晴天にめぐまれたこの日、山野においてはかねてより青年団連絡協議会として計画中の女子青年大会が組合講堂において盛大に挙行された。

第一回の試みでもあり、晴天にめぐまれた公休日のことでもあり、その集りを関係皆一同心配していたけれど危惧にすぎず、全山より約八十名の女青が参加し三名の議長団をお互の手で選出し、会社・組合婦人会の代表の方のあいさつがあり議事に入つた。まず女子青年の活動について山青協副会長より真剣に過去の女子の活動とこれからの在り方について意見が述べられ、全参加者の感銘を深めた。女子青年会への加入の問題発言および男女間の問題等々大いに過去を批判し、新しい時代に立脚した女青の活動こそ世人も注目し、かつその声援をおしまないことを各自が再認識すべきだろう。次に婦人会の会長さんより女子青年に望むと題してお母さん方の立場から、これから嫁ぎ行く女青として青春をより楽しく、しかし楽しみの中に何時の日かくるであろう家庭の主婦としての緻密を充分に身につけられ、新しい時代の母としての努力をお願いするとの暖い激励のことばは、よき他山の石だつたろう。

次に各地区より代表者の登壇を願い私の体験を発表してもらつた。苦しかつた女子青年団を作るまでの思い出話、たのしかつた各種行事の回顧談など身をもつて体験したすべての事柄は、これから女子青年団に加入せんとする人達への試金石となるだろう。

つづいて本大会でもつとも期待されている分科会に入つた。テーマとしては参加者より年の五つの問題が提示された。一、青年団と青年学級の関係　二、女子青年団運営上の悩み　三、未加入者の問題とその対策　四、男女間の問題　五、環境の美化運動　の五グループにそれぞれ分れ、かねてよりやんでいた問題がお互にひざを交えて意見を交換、再び一堂に会して全体討議がなされそれぞれ活発な質疑が集中された。終つて大会を纏みてと女子代表の意見発表を最後に大会の幕を閉じた。各地区において女子青年運動が低調がなげかけられている今日、本大会が世間になげかけた波紋は大きく、各層ともこの女子青年の活動を見直すと同時に大きな期待がかけられることだろう。新しい時代に新しいスタイルを身につけた山野女青の活躍と発展を祈りつつ、大会の傍聴記とする次第である。

（筆者は炭鉱通信員）

喜んだ老人連

子供会・養老院へ

【田川】松原子供会は、夏休み中を利用し、市内夏吉にある養老院を慰問した。

松原子供会約四十名と家族約三十名は、午前九時松原PTA分会長の後藤六六さんの引率のもとに、煙草、菓子など老人に喜ばれそうな数々の品物をもつて養老院をおとずれ、松原に住んでおられる古元早苗さんの振付指導のもとにならいおぼえた童謡の砂山、お猿のかごや、可愛い魚屋さん、雨降りお月さんなどの舞踊と可愛い劇を次から次と披露し老人連と楽しい一日を過した。また終つてすぐ近くにある岩屋の滝を見物、夏休みの一日を楽しくすごした。

黒板を寄贈

向日葵の宮川さん

【三池】本所支部ひまわり地域分会の宮川清太郎さんは、三川坑に勤めておられたが今度の退職に当りいろいろお世話になつた地域の主婦会へ黒板を寄贈された。

黒板はいままで使用していた小さな物と違つて一間真四角の大きな物で活用範囲が多いと主婦会の人達から喜ばれている。

予断ゆるさぬ優勝の行方

ソフトボール大会

【田川】工作支部文化部主催の職場対抗ソフトボール大会は、来る二十二日（第四日曜）午前八時より、三井中央グラウンドで各職場代表十六チームが参加して開催されることになつた。

この大会は毎年一回行われるもので、昨年度優勝は第一仕上げであつた。

今年も戦前の下馬評では第一仕上労務、選鉱、電修A、新工場、旋盤と、かなり実力伯仲のチームがひしめき、優勝の予断はまつたくつけがたい、したがつて当日は好プレーが続出し、熱戦が展開される事は間違いなく、当日の盛況が想われる。

向工作文化部では、家族皆様の声援を切望している。

チンプレー續出

【三池】四山支部では来る八日から毎日曜ごとに地域分会対抗ソフトボール大会を開催することになつた。

このため一日（日曜）には殆どの地域が地区の代表選手をきめようと選手詮考のため、もよりのグラウンドで班対抗のソフトボール大会を行つた。

主婦も交えての試合であり、珍プレー好プレーで終日にぎわつた。

最後の脱走

敗戦の悲劇を描く

昭和二十年八月十五日、日本の無条件降伏によつて再び平和の光がよみがえつたかのように見えたが、満州の日本人が軍隊に見捨てられ汽車もトラックもない広野を眼眩や暴徒に襲われながら悲惨な死の逃避行をつづけた悲劇は余りにも有名であり、異郷の露と消えた日本人は数知れない。

これはその一挿話を描いたもの女教師原節子に引率され学徒従軍看護婦として前線に動員されていた女学生部隊が、共産八路軍に捕われ後方野戦病院に看護婦として徴用される。

この病院に捕虜軍医中尉鶴田浩二が外科医として働いている。妻が上官に暴行され自殺以来ヤル中で陰けんな性格で女学生に不愉快を与としてうつるが、だんだん信頼される男であることがわかるその間女学生と一日本兵が脱走してともに死亡、女教師原節子が女生徒をかばつて八路軍の兵隊につれ去られ暴行をうけるなど、つぎつぎに事件が起る。

鶴田は絶望に身もだえする原を慰め励まし、二人の間には何時か愛情が生まれる。クライマックスでの決死的脱出行は鶴田の犠牲によつて女学生達はやつと脱走に成功することになろう。

敗戦悲劇とくに女性なるが故にひどい目にあつた。根本のテーマは戦争にいじめられた女ということになろう。

男達がおつぱじめた戦争でなんの責任もない女が、こんなにひどい目にあうのを見ると強く「戦争反対」を叫びたい。しかし現実原水爆の実験などつぎつぎと行われてつぎの戦争が準備されているではないか。

原爆のおそろしさは「もうたくさんだ」〃きれいな〃爆弾が使われようと、〃きたない〃爆弾があろうと〃とにかく戦争はいやだ〃叫ぼう戦争反対〃と声を大にして。

（筆者は磯原山野教室部長）

戦争と平和

楓町で映画製作へ

【三池】三川支部緑ガ丘楓地域分会では、例年お盆に行つている盆踊りを今年も行つたが、とくに今年は小型撮影機でフイルムにおさめ、さる一日（日曜）には分会員三十余名の応援を得て荒尾市の鍾霊工場跡で「原爆許すまじ」のロケを行つた。近く分会ではこの両場面をおさめたフイルムで〃戦争と平和〃のテーマで映画鑑賞会を行うことにしている。

この分会では、いままでに決起大会とか、分会内の諸行事を八粍の映画にとつて映写しており、情宣活動にも一役を担つて活躍している。撮影機は分会内の坂口氏が所持しており、ことあるたびに活用させているのだが、原水爆はもういやだということを、こんどは口だけの情宣でなく、目からも行おうということになり、盆踊りと鍾霊工場跡の瓦礫でのロケで雰囲気を大いに出そうとこころみたものである。

地域の人たちは、早くもこの映画を待ちわびているが、分会で製作した映画というだけに大いに期待がもたれている。

× ×

長屋太平記

中村かめお

さんぱん粉

短篇小説

畔柳二美作
久慈悠一版

木村はいつもあおい顔をしていて、無口であつた。背丈は、ひょろひょろと高い方だつたので、雨は一番うしろであつた。

学校のあるその村は、北海道でも有名な馬鈴薯の特産地であつたので、農家の子供達の弁当はたいていでんぷんが多かつた。でんぷんといつても、真白い一番粉は外国へ輸出したり内地へ送りだしたりするので、彼等の弁当は、曇気のいいときで灰色の二番粉を、ふだんは、ぶつぶつのうす黒い三番粉を一にぎり、ハンカチや風呂敷につつんでもつてきた。昼休みになるとその子供たちは、いつせいに井戸端へ走りよつて手のひらに水をすくい、ハンカチのなかのでんぷんに水をふりかけてから両手でこねる。そして、それを丁度丸いパンのような形にととのえてから教室に戻りストーブの上で焼きながら食べるのであつた。ある子供はそれを食べながら、ほんのひとまるめほどの味噌をときどきなめて、それをおかずにしていたがたいていは塩ほどの塩をなめなめ三番粉の昼食をとつていた。

ひょろひょろのつぽの木村は、その村の駅の近くに住んでいた。彼の父母は日雇労働者であつたが彼は時折農家の子供たちと同じように、三番粉のでんぷん弁当を持参していた。ある日、彼は例の黒い三番粉をストーブの上で焼いていた。

「木村さん、それ私の弁当と、とりかえてや」

私はときどき、農家の子供たちのでんぷんと、自分の弁当を交換していた。所がその日、のつぽの木村は、じろりと私の弁当箱をにらんで首を横にふつた。

「いやなのかい？」

「いやだよ。食いたいなら、おまえももつてくればいいでないか」

「なんだい、くそたれ、いじわるんぼう」

「なにこきやがる、ぼいと」

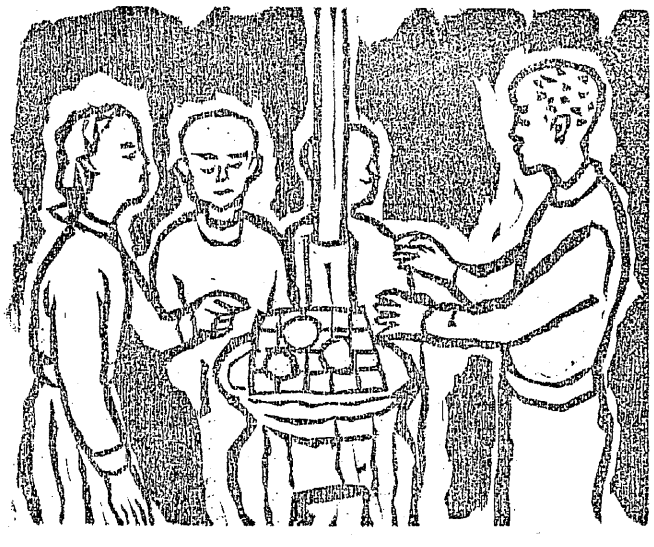
北海道弁のぼいととは、乞食という意味なのだ。私は木村をにらみつけて、自分の席へもどると冷めたい弁当をひらいた。その日いらい、私はしばらく三番粉のでんぷんを口にしなかつた。

やがて私たちは小学校を卒業した。私は札幌の女学校に進学したが、クラスの半数の三番粉のでんぷん弁当の子供たちは、みな農家の働き手として学校へ姿をみせなくなつてしまつた。それから四、五年すぎて、私は女学校を卒業した翌年のある日、突然、同級生であつた岡村という青年が訪れた。彼は街の子で高等科を卒業してから、村の銀行支店に勤務していた彼は「同級生だけで、同人雑誌を作ろうという話がでているんですが」ともちかけてきた。私は早速その「同窓」という雑誌に加入した。

私は大いにはりきつて小説、随筆、短歌、詩の全部を一篇ずつ書いた。そして六号ぐらいのとき、あの、のつぽの木村が突然同人に加入してきた。そのころ彼は、運送店に勤めていて台車つみをしていた。その衝はこの村の特産品のでんぷんなので彼はいつも、頭や顔を真つ白にしていたが、ひるごはんは三番粉であつたかも知れない。その六号のとき、私は大いに気負いたつて論文を発表した。題名は「お百姓さん」「いかに農家は我国において尊げられたる存在であるか……」という書きだしから「我々は彼等の窮苦を十分認識した上「土百姓」よばわりを改め、素直な心持になり以後は「お百姓さん」と呼ぶべきである」の結びに至るまで、私は得意になつて書いたのであつた。

ところが、第七号ができて私はおどろいた。

「お百姓さん」の筆者へ……木村三郎。

「……呼称の改変のみにて、事足れりと誤認せし筆者に改めて猛省をうながす」

私はこれをよんでほほが真赤になつてしまつた。木村の論文が立派なので赤くなつたのではなく、じゆうたすじゆうはにじゆさんのかつての勉強のできのわるかつた木村の生意気ぶりに腹が立つたからであつた。その後岡村の口づてに「二美つぺはひとの三番粉を勝手なときだけ食つてみて「これがお百姓さんのみじめな生活だわ」などと、いい気になつていたら大間違いだつていつてくれ」との木村のことばをきいて、私はその後改めて木村の論文を二度も三度もよみかえし、読み終るたびにほほが赤くほてつてしかたがなかつた勿論、自分の思いあがりの無智を知らされての恥かしさからであつた。